

マルコによる福音書 11 章 1 節～11 節

2017 年 8 月 24 日

古本 靖久

1、聖歌 319 番 「よろこべや たたえよや」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 83 ページ）

4、テキストの位置

いよいよイエス様がエルサレムに入られます。第一回受難予告（8 章 31 節～）以降、イエス様の目は受難の地であるエルサレムへと向けられてきました。

エルサレムにて	日曜日	11:1-6	神が備えたもの
		11:7-11	群衆の歓喜とイエスの沈黙
	月曜日	11:12-14	いちじくの木
		11:15-19	神殿とは
	火曜日	11:20-26	信仰と祈り
		11:27-33	権威について
		12:1-12	ぶどう園と農夫のたとえ
		12:13-17	神のものは神へ

マルコ福音書は受難の地エルサレムを目的地とした、長大な受難物語であるといえます。

エルサレムに入ったイエス様はその後、逮捕され、十字架につけられ、死んで墓に葬られます。そして日曜の朝に復活します。マルコ福音書ではその出来事を 1 週間という枠組みの中に入れていきます。

この福音書には 11 章 12 節「翌日」、11 章 20 節「翌朝早く」、14 章 1 節「さて、過越祭と除酵祭の二日前になった」、14 章 12 節「除酵祭の第一日」、15 章 1 節「夜が明けるとすぐ」のような時間をあらわす言葉は、マタイやルカでは省かれているところもあります。またマルコに書かれている物語が省かれていたり、順番が変わっていたりして、明確にイエス様の最後の日々を「一週間」という枠の中で書いているのはマルコだけです。

聖公会の教会暦においても、復活日の前の一週間は「聖週」として、大切にしています。この一週間という考え方は、マルコ福音書からきています。ただし本当に一週間のうちにこれらのことがあったとは、断定できません。

5、節ごとに

◆神が備えたもの

11:1 (そして) 一行(彼ら)がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにある(に沿った)ベトファゲとベタニアにさしかかった(近づいた)とき、イエス(彼)は三人の弟子(たちのうちの二人)を使いに出そうとして、

イエス様たちは、エルサレムのすぐそばに来ました。ベタニアはエルサレムから約3km東にある町です。またベトファゲとは「いちじくの家」という意味で、ベタニアよりもさらにエルサレムに近い場所です。

また近くにはオリーブ山がありますが、この山は最後の審判のときに神さまが来られる場所として期待されていました。ゼカリヤ書にはこのようにあります。「その日、主は御足をもって エルサレムの東にある オリーブ山の上に立たれる。」(ゼカ 14:4)

イエス様のエルサレム入りとメシア待望とが結び付けられているのかもしれませんが。さてそこで、イエス様は弟子を使いに出します。

11:2 (そして彼は彼らに)言われた(う)。「(あなたたちは)向こうの(に見える)村へ行きなさい。(すると)村(そこ)に入るとすぐ、(人が)まだだれも乗ったことのない子ろばの(が)つないである(つながれている)のが(を)見つかる(けるだろう)。それをほど(解)いて、連れて来なさい。

この出来事は、イエス様があらかじめ村に入り、前もって打ち合わされていたのだと考える人もいます。しかしそのような合理的解釈をしてしまうと、この6節までの箇所が伝えようとしていることがぼやけてしまうと思います。

ここに出てくる「子ろば」は貴族や軍人が乗るものではなく、庶民が乗る家畜です。さらに「まだだれも乗ったことのない」ことが強調されています。旧約聖書では、動物や物を犠牲などの神聖な用途に用いられるときには、使われたことのないものでなければならないという決まりもあります。

11:3 (そして)もし、だれかが(あなたたちに)、『なぜ、(あなたたちは)そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。(そして)すぐここにお返しになります』と言いなさい。」

ここに出てくる「主」とは誰のことでしょうか。マルコ福音書の中で、イエス様はご自分のことを「主」とは呼びません。ではろばの所有者でしょうか。物語を讀んでいくと、「主」は「神さま」を指しているように思います。子ろばは神聖な目的に使用されるのです。

11:4 (そして) 二人(彼ら)は、出かけて行くと(き)、表通りの(外の)戸口に子ろばの(が)つないである(がれている)のを見つけたので、(そして)それをほどいた(解く)。

二人の弟子たちは出かけて行きます。するとイエス様が言った通り、子ろばがつながれていました。ずっと行動を共にしてきた弟子たちは、イエス様が事前に打ち合わせて、子ろばを準備しておいたはずはないと知っていました。それでも弟子たちは、出かけて行きました。



わたしたちも、聖書や祈りを通してイエス様に道を示されることがあります。けれども明確なビジョンが見えないために、前に進むのを躊躇することもあるでしょう。しかし、イエス様の言葉をただ信じて進むことが大事なのです。

11:5 すると、そこに居合わせた(立っていた)ある人々(の何人か)が、(彼らに)「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。

そこに人々が立っていました。この地方では、仕事をしていない男たちは、広場などにたむろしておしゃべりをしていたようです。彼らはイエス様の予言通りに弟子たちに向かって質問します。

11:6 (そして)二人(彼ら)が、イエスの言われたとおりに話す(言う)と、(彼らは彼らを)許してくれた。

弟子たちがイエス様の言葉をそのまま伝えると、子ろばを連れていくことを村の人たちは許してくれました。

ありえないことです。ローマ兵であれば人や家畜を自由に徴用することはできました。しかしガリラヤから来たよく知らない連中に、大切な家畜を貸すことなど、普通考えられないことだと思います。

ではなぜ子ろばを借りることができたのでしょうか。それは神さまがすべてを備えられたからです。神さまのみ心に従って、すべてのことは為されていきます。み心に沿って歩む、そのときに神さまはみ手を差し伸べてくれるのです。

◆群衆の歓喜とイエスの沈黙

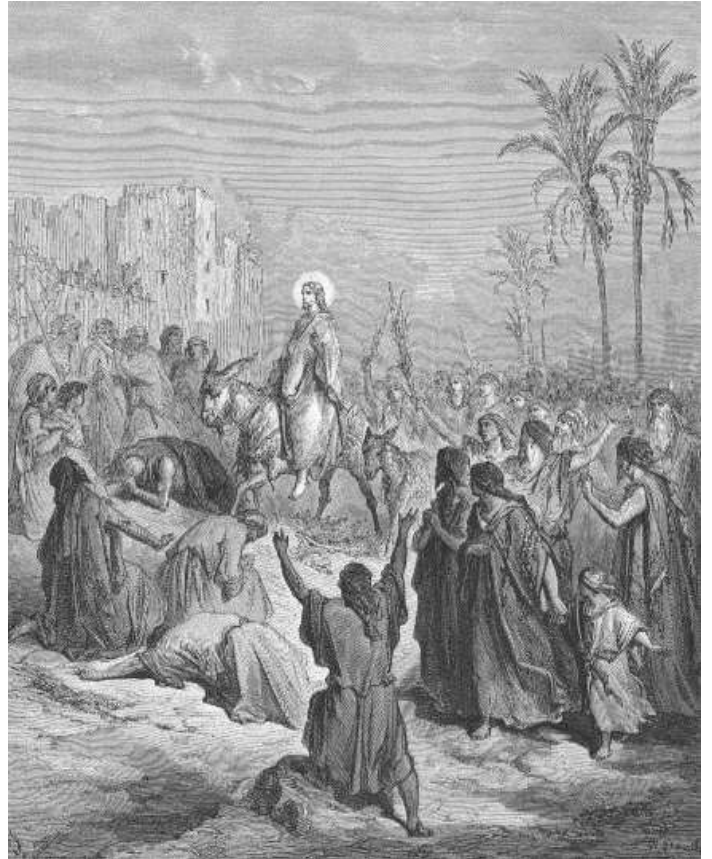
11:7 (そして) 二人(彼ら)が子ろばを連れ、イエスのところに戻って(連れて)来て、(そして)その上に自分(たち)の服をかけると、イエス(彼)はそれにお乗りになった。

イエス様はついに、エルサレムに入ります。この入城の場面は、王の即位式を思い起こさせます。服を動物や道の上に敷くという行為は、即位式のときによく見られるからです。

しかし普通の王の即位式では絶対に見られない状況がここにはあります。それは主役であるイエス様が「子ろば」に乗っているということです。マタイ福音書の並行箇所にはゼカリヤ書の引用があります。

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者 高ぶることなく、ろばに乗って来る 雌ろばの子であるろばに乗って。」(ゼカ 9:9)

イエス様は「平和の王」として、エルサレムに入ります。そのことを人々は理解していたのでしょうか。



11:8 (そして) 多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝(枝葉)を切って来(た)て道に敷いた。

イエス様の復活の前の日曜日といえば、棕櫚(しゅろ)の主日です。映画や絵画で、群衆が「ホサナ、ホサナ」と棕櫚の葉を振り回すイメージがありますが、エルサレム近郊には棕櫚はほとんどないそうです。また福音書の中で棕櫚を登場させているのはヨハネ福音書だけで、マルコ福音書にはまったく出てきません。

人々は周りにある木の枝を折り、それを振りながらイエス様を歓迎していたのでしょうか。まるでマラソンの応援をする人が、沿道で旗を振っているように。そして自分の服を道に敷きます。イエス様が子ろばに乗って移動したのは、かなりの距離だったと思います。このことから、たくさんの人々がイエス様の周りに集まったことがわかります。

11:9 そして、前を行く者（たち）も後に従う者（たち）も叫んだ。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。」

イエス様がエルサレムに向かう道を歩き出したとき、弟子たちは恐れながらイエス様の後をついて行きました。今や、エルサレム郊外に来たイエス様の足もとには人々の服が敷かれ、前にも後ろにも人だかりができています。

彼らは「ホサナ」と叫びます。「ホサナ」とは「わたしたちを救ってください」という意味です。「ホサナ～祝福があるように」という祈りは詩編にも登場し、主要な祭りの中で唱えられていたと考えられます。過越祭や仮庵祭でも使われていたようです。神殿に近づく巡礼者は、神さまを賛美するためにイエス様の元でこの詩編を唱えたのです。

11:10 （来たるべき）我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」

イスラエルの人々は、「我らの父ダビデの国」の到来を待ち望んでいました。それは地上的な救いが与えられる国でした。圧政からの解放、病気からのいやし、そして敵国の滅亡など、来るべきメシアによってかなえられると考えていたのです。

過越祭にはイスラエルの男子は必ずエルサレムに行くように、義務付けられていました。彼らはイエス様に、「ダビデの国」の実現を期待して、熱狂的に叫んだのでしょう。

ところがイエス様は、「ダビデの国」を宣べ伝えるために来たものではありませんでした。彼が伝えたかったのは、「神の国」です。

イエス様は人々が歓喜する中、何も語りません。人々の行動を良しとすることも、いさめることもされないのです。その沈黙の中に、「わたしはメシアであり、人々を救う。しかしあなたがたが期待しているようにではない」というイエス様の思いがあったのかもしれませんが。

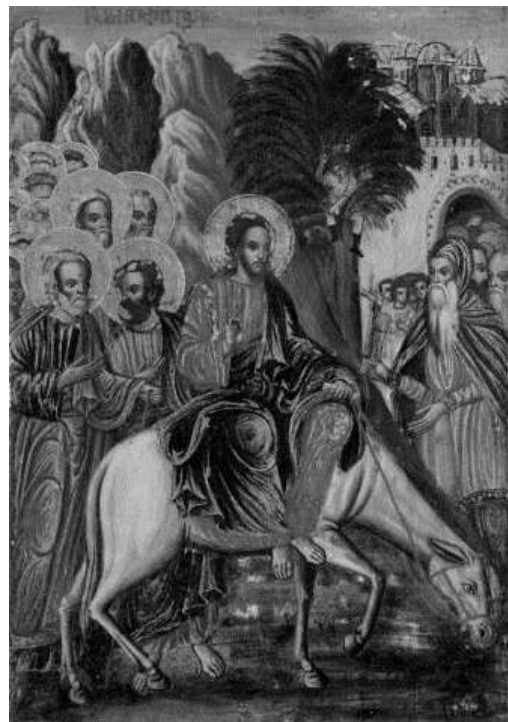
11:11 こうして（そして）、イエス（彼）はエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、（つた。）（そして）廻りの様子（すべて）を見て回った後（り）、もはや（すでに）夕方になったので、十二人を連れて（と共に）ベタニアへ出て行かれた。

マタイ福音書とルカ福音書ではこの後すぐに、神殿の商人たちを追い出します。しかしマルコ福音書では、エルサレムの様子を一瞥するだけで、またベタニアに戻ります。イエス様と神殿との間には、もはや埋めることのできない溝ができてしまっていたのではないのでしょうか。

<今日の箇所から>

子ろばを調達する物語は、とても不思議な印象をわたしたちに与えます。しかしすべてを言い当てるイエス様の超能力者のような姿に目を向けすぎると、大事なことを見失ってしまうかもしれません。

もし使いに出た弟子たちが、イエス様の言うことを信用せずに勝手なことをしていたとしたら、子ろばはイエス様の元には届きませんでした。弟子たちがイエス様の言葉を信じて実行したから、イエス様は子ろばに乗ることができたのです。



わたしたちは神さまに、何を示されているのでしょうか。示された道を、ただ信じて歩もうとしているのでしょうか。「そんなバカな」、「こんなことが起こるはずがない」と思うのは簡単です。しかし神さまはわたしたちの思いを超えて、必ず導いてくださると信頼することができたとしたら、どんなにすばらしいことでしょうか。

そしてエルサレムに入城するイエス様の、沈黙にも目を向けたいと思います。イエス様は群衆が自分を見捨て、「十字架につけろ」と叫ぶようになるということを、すでに知っていたのかもしれませんが。

マルコ福音書では、このエルサレム入城のわずか5日後に、イエス様の死刑の判決が下されることとなります。「ホサナ、ホサナ」とあれだけ叫んでいた人たちが、どうして「十字架につけろ」と言うようになったのか。そこには、彼らが求める王の姿と、イエス様の姿とがあまりに違ったからだと思います。

子ろばに乗って、群衆を扇動するわけでもなく、神殿の境内を占拠することもしない。イエス様は自分たちの「今」の必要を満たしていなかったのです。

では、わたしたちにとってのイエス様はどうでしょうか。「ホサナ(お救い下さい)」と叫ぶのは、何のためでしょうか。

イエス様が十字架へと向かっていく中で、改めて問いかけていきたいと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は9月28日(木)10時30分からです。「いちじくの木、神殿とは」(マルコ11:12~19)について学んでいきます。